

レーニンと過剰資本

外 山 忠

I

1950年代半ばから現在に至るまで我が国において続けられている資本輸出の必然性をめぐる議論に関して、先に筆者は、第一に、その課題は資本輸出が資本主義の最高の段階としての帝国主義のもとで法則としての理論的意義を獲得するに至る必然性を理論的に解明する点にあること、換言すれば、レーニン「資本主義の最高の段階としての帝国主義」(以下「帝国主義論」と略)四章「資本の輸出」において指摘された資本輸出の必然性規定の内容を理論的に明らかにすることであり、従ってまた、その射程は帝国主義に係っていることを論じ、第二に、かかる課題と射程を担う資本輸出の必然性論の解明のためには、何よりも独占資本主義段階に固有の過剰資本形成の問題が解決されなければならないが、同時に、そのことは決して、資本主義一般のもとでの資本輸出と過剰資本との関連を解明すべき資本輸出論が、あらゆる点において資本輸出の必然性論に係りが無いということの意味するものではなく、むしろ、後者は前者に補完されることによって、帝国主義体制のもとでの世界経済を解明する際の資本輸出の分析視角——それは基本的にレーニン「帝国主義論」において与えられているが——に正当性を与えるという役割を担っていることをも示唆しておいた⁽¹⁾すなわち、資本輸出論、資本輸出の必然性論及び帝国主義体制のもとでの資本輸出の分析視角という三者の関連の問題である⁽²⁾。

そこで、資本輸出の必然性論を解明し、もって現代資本輸出の分析視

角に対して十全な正当性の根拠を与えるためにも、改めて資本輸出論と資本輸出の必然性論との関連が問われることになるだろうが、この点の解明にあたっての中心論点は過剰資本形成の把握に他ならないであろう。すなわち、資本主義一般のもとでの資本輸出の条件たる過剰資本と帝国主義のもとでの資本輸出の必然性の条件たる過剰資本は、その両者が各々の発生を獲得するに至る論理において、更にまた存在形態等において、いかなる関連と区別とを有しているのか、この点を明らかにすることが資本輸出論と資本輸出の必然性論との関連を解く鍵を握っているのである。

本稿の基本的な目的もまた、如上の資本輸出論と資本輸出の必然性論との関連を探りだすことにある。だが、ここでの直接の検討対象はレーニン「帝国主義論」に限定されており、従って、両者の関連の検討もまた「帝国主義論」の枠内にみられるそれに限定されている。かかる対象の限定から、ここでの課題もまた次の点に絞られることになる。すなわち、第一に、「帝国主義論」体系の重要な一環として資本輸出分析が位置づけられなければならなかった論拠を「帝国主義論」に即してやや詳細に検討すること、第二に、かかる論拠を前提に、そのなかで、資本輸出論と資本輸出の必然性論とがいかなる関連と区別のもとに把握されているのか、従ってこの両者に係る過剰資本がいかなる内容をもって措定されているのかを明らかにすること、第三に、もってこの両者及び両者の関連を解明すべき一定の方向を獲得することである。

このような課題の限定からは、行論が示すように、資本輸出論に係る過剰資本と資本輸出の必然性論に係るそれとの関連、区別を全面的に解明することはできないであろう。この意味で本稿は、資本輸出と過剰資本との関連に接近するための、レーニン「帝国主義論」理解を媒介としての一準備作業である。

- 1) 拙稿「資本輸出の必然性と資本輸出分析」『下関市立大学論集』23巻1号（以下、拙稿Iと略）
- 2) これら三者のうち、資本輸出の必然性と帝国主義体制のもとでの資本輸出の

分析視角との関連——レーニン「帝国主義論」における資本輸出の必然性規定と四章の分析視角との論理的関連——については、不十分ながら拙稿「資本輸出と国際独占体——レーニンの把握について——」北海道大学「経済学研究」26巻4号（以下拙稿Ⅱと略）で論じておいたので参照されたい。

Ⅱ

レーニンが帝国主義のもとでの資本輸出を論ずるにあたって、それが有する意義の種々の側面に注目していることは周知の事実であろう。若干の例をあげておけば、資本主義の寄生性及びその延長線上における金利生活者国家との関連、資本主義的生産の植民地への移植との関連、金融的従属との関連、世界の経済的及び領土的分割との関連、労働運動における日和見主義との関連⁽¹⁾等々である。

確かに、これらの側面はいづれも資本輸出の意義の解明において重要な問題であることは間違いないであろう。だが、レーニンがこれらの側面に注目するに至った理論的根拠を問うとすれば、それは何よりも、帝国主義においては「商品輸出とは区別される資本輸出が、とくに重要な意義を獲得している⁽²⁾」という表現のなかに見出されなければならない。すなわち、帝国主義のもとでの資本輸出を種々の側面を含む総体において解明する際の論理的関係からみれば、それが「とくに重要な意義を獲得している」理論的根拠を確定することによってはじめて、如上の種々の側面もまた十全な、豊かな内容において把握されると言うべきであろう。

そして、かかる意味での資本輸出の理論的根拠を総括的に表現したのが、レーニン「帝国主義論」四章での商品輸出から資本輸出への典型変化の命題にはじまり資本輸出の必然性規定をもって終る第一、第二、第三パラグラフに他ならない。資本輸出論と資本輸出の必然性論との関連を探る鍵もまたここに存在する。なぜなら、ここにおいてはじめて過剰資本が明示的に措定され、それと資本輸出との関連が説かれているからである。「帝国主義論」四章第一～第三パラグラフが検討の対象となる理由である。

だがこれは事の一面であろう。なぜなら、言うまでもなく、「帝国主義論」四章は「帝国主義論」体系の一環として存在している。このことは一般的に言っても、四章にみられる個々の叙述、規定の意味、内容が必ずしも四章での論理展開の枠内でのみ十分に把握され得ることを保障するものではないこと、従って、「帝国主義論」体系との関連において、はじめて十分に究明され得る側面をも有することを意味しよう。本稿の当面の課題である資本輸出論と資本輸出の必然性論との関連についても同様のことが言い得るのは当然である。とすれば、レーニンにおけるこの両者の関連の把握、従って過剰資本把握の全体像の解明は、四章の枠内においてのみではなく、更に積極的に「帝国主義論」体系のなかでの位置づけにおいても検討されることが不可欠となる。かかる考察を通して過剰資本を軸とする両者の関連がいかなるものとして浮び上がってくるか、以下みてみよう。

そこでまず、「帝国主義論」四章の枠内での論理展開をやや詳細に検討することによって、そこで措定されている過剰資本の内容を明らかにしてみよう。検討を要するのは、第二、第三パラグラフの論理展開及びそれらと「自由競争が完全に支配していた古い資本主義にとっては、商品の輸出が典型的であった。だが、独占が支配している最新の資本主義にとっては、資本の輸出が典型的となった⁽³⁾」という第一パラグラフの命題⁽⁴⁾との関連である。

さて、第二パラグラフは次のように展開されている。検討の必要上、全文を引用しておこう（但し、A), B), C), D) は引用者がつけたもの）。

「A) 資本主義とは、労働力も商品となるような、最高の発展段階にある商品生産である。一国内の交換だけでなく、とくに国際間の交換の増大は、資本主義の著しい特徴的な特質である。個々の企業、個々の産業部門、個々の国の発展における不均等性と飛躍性は、資本主義のもとでは不可避である。B) 最初イギリスが他の国々よりさきに資本主義国となり、十九世紀のながごころには自由貿易を採用して、『世界の工場』、すなわち、すべての国への製造品の供給者という役割を要求し、他の国

々は、これと交換に、イギリスに原料品を提供しなければならなかった。C) しかしイギリスのこの独占は、すでに十九世紀の最後の四半世紀にくつがえされた。なぜなら、一連の他の国々が、『保護』関税にまもられて、自立的な資本主義国家に発展したからである。D) 二十世紀にはいるところに、われわれは他の種類の独占が形成されたのを見る。それは、第一に、資本主義の発展したすべての国々での資本家たちの独占団体が形成されたことであり、第二には、資本の蓄積が巨大な規模に達した少数のもっとも富んだ国々の独占的地位が形成されたことである。先進諸国では膨大な『過剰の資本』が生じた⁽⁵⁾」

この引用文において検討され、確認されなければならないのは次の点である。まず第一に、引用A)がB),C),D)の論理展開を根本的に規定しているということである。

みられるように、A)では資本主義一般の規定に基いて交換の増大及び発展の不均等性、飛躍性が摘出されているが、この内容自体はすでに「ロシアにおける資本主義の発展」において、外国貿易の必要性の第二、第三命題として提起されていたものである。すなわち、「相互に『市場』として役だつ種々の産業部門は均等に発展するものではなく、相互においこしあっている。そして、より発展した産業は外国市場をもとめ⁽⁶⁾」、更に「生産方法の不断の改変と、生産規模の無限の拡大⁽⁷⁾もまた外国市場の必要性へと導くということである。従ってA)の内容は、発展の不均等性、飛躍性に基いて交換の増大が生ずるという関連において一応は理解されえよう。だが、その意味するところは以上に尽きるものではない。なぜなら、一方で、レーニンにおいては、外国貿易、交換の増大が資本主義にとっての特質たる所以が、「資本主義は、その支配の範囲をたえず拡大することなしには、また新しい国々を植民地化し非資本主義的な古い国々を世界経済のうずのなかに引入れることなしには、存在し発展することができない⁽⁸⁾」ということのなかに、換言すれば、それが資本の支配の国際化をもたらすものとしての役割を担うことのなかに求められており、⁽⁹⁾他方で、資本主義発展における不均等性、飛躍性は資本蓄積

の進展によって基本的に規定されざるを得ないからである。この点を考慮するならば、A)の内容は、資本蓄積に規定される発展の不均等性、飛躍性に基いて資本の支配が国際化すること、この点に資本主義の特質が存在するという論理において理解されるべきものであろう。¹⁰⁾

では、如上の内容を有する引用A)がB),C),D)の論理展開を規定しているというのはいかなる意味においてか。それはA)に含まれる論理が資本主義の歴史的発展過程においていかなる現実的な姿態をもって現れざるを得ないのかという点に照準が定められて、B),C),D)の展開がはかられていることに求められよう。

まず、B),C),D)がそれぞれ「十九世紀のなかごろ」、「十九世紀の最後の四半世紀」、「二十世紀にはいるころ」という特定の歴史的時期に係っていることから、その叙述の展開が資本主義の歴史的発展過程に沿ったものであることは明らかである。次に各々の内容とA)との関連を検討してみよう。

B)で指摘されているのは、イギリスを「世界の工場」とする国際分業の形成である。ここでの「世界の工場」という表現のなかには、一面では、イギリスの世界市場における工業生産力の独占的地位、従ってイギリスと他諸国との資本蓄積の不均等性、イギリスの資本蓄積における飛躍性が集約されており、他面では、その内実たる商品輸出がかかる資本蓄積の不均等性、飛躍性に基くイギリスの側からみての資本の支配の国際化（イギリスが「製造品の供給者という役割を要求し」、他諸国は「原料品を提供しなければならなかった」〔傍点一引用者〕という表現に注意されたい）を担う現実的姿態に他ならないことを読みとることができる。

続いてC)では、他諸国の自立的な資本主義国家への発展によるイギリスの「世界の工場」としての独占的地位の崩壊が指摘されている。ここで重要な点は、自立的な資本主義国家への発展とは、自立的な再生産構造を確立した資本主義国家の形成に他ならず、また、かかる自立的な再生産構造の確立は、当該国の資本蓄積の増大によって根本的に規定さ

れているということである。この点の確認を前提とすれば、ここでの基本的内容は、イギリスと他諸国との資本蓄積における圧倒的な不均等性、飛躍性が、イギリス及び自立的な資本主義国家に発展した諸国と他諸国との資本蓄積における不均等性、飛躍性に転化しつつあり、従って、この不均等性、飛躍性を基盤とする資本の支配の国際化もまたA)におけるそれとは異なる内容のものに変化しつつあることが示唆されている点に求められよう。この時期がすぐれて資本主義の自由競争段階から独占段階への移行期、過渡期たる所以である。

D)の検討に移ろう。そこでの要点はまず第一に、二種類の独占のうちの第一の独占団体の形成は、C)で指摘された自立的な資本主義国家への発展、従って資本蓄積の増大を基礎として説かれていることである。このことは、「資本主義の発展したすべての国々」とは、他ならぬC)でのイギリス及び「自立的な資本主義国家に発展した」「一連の他の国々」を指すものであることから明瞭である。第二に、二種類のうちの第二の独占形成もまた資本蓄積の規模の巨大化から説かれることによって、それが同時に「少数のもっとも富んだ国々」と他諸国との資本蓄積における不均等性、飛躍性及びその拡大を内包していることである。第三に、従ってここでの論理は、やや極端化すれば、自立的な資本主義国家における資本蓄積の増大→各国での独占団体の形成→資本蓄積における不均等性、飛躍性の拡大→資本主義の発展した諸国の世界経済における独占的地位の形成→先進諸国での膨大な過剰資本の発生、として把握することができよう。そして第四に、資本蓄積の増大及びその不均等性、飛躍性を基礎としたかかる論理展開の終結点として過剰資本の発生が位置づけられていることである。上の諸点から次の結論が導きだされよう。すなわち、一面では、ここでの過剰資本の発生は資本蓄積における不均等性、飛躍性の具体的表現に他ならないが、同時にそのことによって他面では、この過剰資本と資本の支配の国際化を担う現実的姿態との係りが示唆されている¹¹⁾ということである。

さて、第二パラグラフを通して確認されるべき第二の点は、ここでの

展開が第一パラグラフにおける典型変化の命題に対応していることである。

なぜなら、典型変化の命題は、資本主義的国際経済関係の創出過程における基本的な推進力及び資本主義の歴史的発展過程におけるその変化を指摘したものであるが、¹²⁾この推進の主体が先進資本主義諸国であることにおいて、資本主義的国際経済関係の創出過程は同時に資本の支配の国際化の過程を意味し、その推進力は資本の支配の国際化における現実的姿態であると見做しうるからである。第二パラグラフに即して示せば次のようになる。B)は十九世紀中葉を対象とすることで、第一パラグラフの「自由競争が完全に支配していた古い資本主義」に対応し、またそこでの国際分業は、イギリスからの製造品の輸出、他諸国からの原料品の輸出を基本的な内容とすることにおいて国際経済関係創出の基本的推進力、現実的姿態としての商品輸出の典型性に対応するものである。かかる構造はC)に示された十九世紀最後の四半世紀に崩壊し、やがて第一パラグラフでの「独占が支配している最新の資本主義」が出現する。「二十世紀にはいるころ」という指摘及び独占形成を基礎とする論理展開において、D)がこの「最新の資本主義」を対象としていることは明らかである。¹³⁾従って、D)における論理展開の必然的帰結である過剰資本は、第一パラグラフとの対応関係において、独占資本主義段階での国際経済関係創出の基本的推進力、現実的姿態たる資本輸出の典型性に係るものであることが明瞭に示唆されているのである。¹⁴⁾

第三に、ここで導かれる過剰資本の発生が、質と量との両面において規定されていることである。

すなわち、質的側面において、先にみた第二パラグラフの論理展開及びそれと第一パラグラフとの対応関係から、それが独占資本主義段階に固有なものであることは疑問の余地がない。だが他方で、それがかかる質的側面を有することの内容が、「膨大な『過剰の資本』」という指摘から明らかになうに、量的規定性において表明されているのである。そして、この量的規定性が「資本の蓄積が巨大な規模に達した」ことに規定され

ていること、従って、資本蓄積の規模に過剰資本の量が対応していることをも確認しておこう。

これまで、三点にわたって第二パラグラフの内容を検討してきたが、当面の課題であるレーニンの過剰資本把握に関して、そこから導きだされるのは次の点であろう。まず第一に、過剰資本が一貫して資本蓄積に規定されるものとして把握されており、従って、過剰資本が質と量との両面において規定されていることは、同時にそれが資本蓄積における質と量との両面に係って規定されなければならないことを意味するということである。では、資本蓄積をその両面において把握するということは何を意味するのか。言うまでもなく、資本主義一般あるいはそれを体現する資本主義の自由競争段階から独占段階への移行を基本的に把握することに他ならない。D)における独占形成がすぐれて資本蓄積の増大から説かれていたことを想起されたい。すなわち、資本主義一般のもとの資本蓄積の増大は一定の時点において独占の成立をもたらすのであり、この点の認識の欠如をもってしては、「生産の集積による独占の発生は、総じて資本主義の現在の発展段階の一般的、根本的な法則⁽⁴⁹⁾であることも、「量の質への移行、すなわち高度に発展した資本主義の帝国主義への移行」⁽⁵⁰⁾も語り得ないと言わねばならない。かかる資本蓄積の役割を媒介として、はじめて過剰資本が質と量との両面において規定されることの意味も十分に与えられることになる。つまり、巨大な規模に達した資本蓄積が独占資本主義に固有の蓄積様式に基いている以上、それに対応する膨大な過剰資本（量的規定性）は独占資本主義の蓄積様式に規定された過剰資本（質的規定性）に他ならないことが確認されよう。第二に、しかしながら、独占資本主義に固有の資本蓄積様式とはいかなる構造をもつものであるかは触れられてはいない。従って、そこから導かれる過剰資本は未だ発生を獲得するに至る論理を欠落させたまま措定されていることである。そして第三に、上にみた資本蓄積と過剰資本との関連の把握は、資本主義一般あるいは資本主義の自由競争段階での資本蓄積と過剰資本との関連を決して排除するものではないということである。

なぜなら、独占資本主義段階での資本蓄積と過剰資本との対応をその量的増大において把えることは、資本主義一般のもとでの両者の対応関係を前提とすることによってのみ可能となるからである。

- 1) これらの側面はどれも「帝国主義論」においてとりあげられており、また「帝国主義論」以外においても言及されている。「帝国主義論」以外では、管見の限り、次のものがある。「第二インタナショナルの崩壊」邦訳「レーニン全集」大月書店（以下「全集」と略）21巻，pp.213—14，226—27，「ヨーロッパ合衆国のスローガンについて」「全集」21巻，pp.350—51，「ツインメルヴァルド左派の決議草案」「全集」21巻，p.355，「自決にかんする討論の総括」「全集」22巻，p.394，「帝国主義と社会主義の分裂」「全集」23巻，pp.113—14，「H.グロイリヒによる祖国擁護の擁護についての一二の短いテーゼ」「全集」23巻，p.285，「中立の擁護」「全集」23巻，p.288，「外交政策の秘密」「全集」24巻，p.398，「戦争と革命」「全集」24巻，pp.428—29，「共産主義インタナショナル第二回大会」「全集」31巻，p.223
- 2) 「帝国主義論」「全集」22巻，p.308
- 3) 同上，p.277
- 4) この命題の内容については既に拙稿Ⅱ，pp.207—11で論じておいたので，ここでは直接にはとりあげず，必要な限りでの関説に止める。
- 5) 「帝国主義論」「全集」22巻，p.277
- 6) 「ロシアにおける資本主義の発展」「全集」3巻，p.44
- 7) 同上，p.44
- 8) 同上，p.629
- 9) 資本の支配の国際化については，拙稿Ⅱ，pp.208—09参照。
- 10) 資本主義一般の特質を規定する際に，レーニンが資本の支配の国際化を交換の増大に求めているのは，資本主義一般をすぐれて体现するのが他ならぬ自由競争段階の資本主義であり，そこでは，資本の支配の国際化が交換の増大，すなわち商品輸出として現れたことによるものであろう。
- 11) ここで「示唆」という表現を用いたのは，かかる係りが論定されているのは，第二パラグラフにおいてでなく，未だ検討の範囲外にある第三パラグラフにおいてだからである。
- 12) 注4）参照。
- 13) 「ヨーロッパについては，新しい資本主義が古い資本主義に最終的にとってかわった時期を，かなり正確に決定することができる。すなわち，それは二十世紀の初めである。」（「帝国主義論」「全集」22巻，p.230）「十九世紀末の

好景気と一九〇〇—一九〇三年の恐慌。カルテルは全経済生活の基礎の一つとなる。資本主義は帝国主義に転化した。」(同上, p.232)

14) 注11) 参照。

15) 「帝国主義論」全集」22巻, p.230

16) 同上, p.308

III

続いて第三パラグラフの内容の検討に移ろう。ここでもまた必要上、全文を引用しておく(但し、A), B), C), D) は引用者がつけたもの)。

「A) もし資本主義が、現在いたるところで工業よりおそろしくおくられている農業を発展させることができるなら、またもし資本主義が、めざましい技術的進歩にもかかわらず、いたるところでなかば飢えた、乞食のような状態にとりのこされている住民大衆の生活水準をひきあげることができるなら、そのばあいには、もちろん、資本の過剰などは問題になりえないであろう。そのような『論拠』は、小ブルジョア的資本主義批判者たちによってたえずもちだされている。だが、そのときには、資本主義は資本主義でなくなるであろう。なぜなら、発展の不均等性も、大衆のなかば飢餓的な生活水準も、ともにこの生産様式の根本的な不可避的な条件であり、前提であるからである。B) 資本主義が依然として資本主義であるかぎり、過剰の資本は、その国の大衆の生活水準をひきあげることにはもちいられないで——なぜなら、そうすれば資本家の利潤はさがることになるから——、国外へ、後進諸国へ資本を輸出することによって利潤をたかめることにもちいられるであろう。これらの後進諸国では、利潤は高いのが普通である。なぜなら、資本がすくなく、地価は比較的安く、賃金は安く、原料は安いからである。C) 資本輸出の可能性は、一連の後進国がすでに世界資本主義の取引のなかにひきいれられ、鉄道幹線が開通するか敷設されはじめ、工業の発展の初歩的条件が保障されている等々のことによって、つくりだされる。D) また、資本輸出の必然性は、少数の国々では資本主義が『爛熟し』、資本にとっては(農業の未発展と大衆の貧困という条件のもとで)『有利な』投下の場

所がない、ということによってつくりだされる。⁽¹⁾

この引用文における論理展開の基本的特徴及びそれと第一、第二パラグラフとの関連を把握するに必要な限りで、まずA) からD) の各々の内容を吟味しておこう。

A) では、工業と農業との発展の不均等性、大衆の飢餓的な生活水準が資本制生産様式の条件、前提である以上、過剰資本は避けられないことが小ブルジョア的資本主義批判者たちの資本主義理解に対する批判として指摘されている。ここで確認されるべきは、第一に、その論理が資本主義一般を対象としていることである。冒頭の「もし資本主義が、現在いたるところで」という指摘からうかがえるように、ここでレーニンが直接念頭に浮かべていたのは帝国主義であろう。だが、その論理自体は上部構造としての帝国主義がその上に立つところの資本主義一般⁽²⁾の範囲内でのそれである。なぜなら、資本制生産様式の条件、前提とされている工業と農業との発展の不均等性は、第二パラグラフからも明らかのように、資本主義一般に固有の個々の産業部門間のそれであり、⁽³⁾ここでもまたその域を出ていないからである。すなわち、レーニンは、ここでの問題がすぐれて帝国主義に係るものでありながら、批判の論理としては資本主義一般のもとでのそれで十分であると捉えていたわけである。従って、第二に、ここで指定されている過剰資本もまた資本主義一般のもとで存在するそれに他ならない。

上の二点はまた、第二パラグラフとの関連で、次のことをも示している。第一に、第二パラグラフでは示唆の域をでなかつた資本主義一般のもとでの資本蓄積と過剰資本との対応関係の存在が、資本蓄積との関連は明示されてはいないが、過剰資本の存在が指摘されることによって、より明確にされていること、第二に、ここでの過剰資本は、第二パラグラフにおける質、量ともに規定された独占資本主義段階に固有の過剰資本とはその性格を異にしている、ということである。と同時に、第三パラグラフが資本主義一般を対象とした叙述をもってはじまっていることは、その論理展開が、独占段階を対象とした叙述をもって終っている第

二パラグラフのその直接の延長線上に位置づけられるものではないことを意味している。

続いてB)では、内外の利潤率差に基いて、過剰資本が国外に輸出されざるを得ないことが指摘されているが、ここでも次の点が確認されなければならない。第一に、この叙述が明らかにA)を前提としていることから、ここでの過剰資本もまた資本主義一般のもとでのそれであり、第二に、資本主義一般のもとでの過剰資本と資本輸出との関連を論定することによって、第二パラグラフにみられた質、量ともに規定された過剰資本と資本輸出の典型性との対応関係の示唆が一步具体化されていることである。

さて、C),D)の内容と両者の関連については、すでに別稿で論じたところでもあり、⁽⁴⁾ここではその結論のみに止めよう。まず、C)での資本輸出の可能性をつくりだすのは、その内容において、資本主義の自由競争段階における世界市場の形成であり、D)での資本輸出の必然性をつくりだすのは、帝国主義世界体制の成立に他ならないこと、更にかかると可能性から必然性への移行を媒介する一定の条件が独占の形成とそれに伴う過剰資本の発生であり、⁽⁵⁾従って、ここでの論理は資本主義の歴史的発展過程を内包しているということである。

第三パラグラフにみられる個々の叙述に関するこれまでの検討から、それが極めて特徴的な論理展開を有することが認められよう。それはまず、第二パラグラフの論理展開との共通性に求めることができる。すなわち、両パラグラフともまず資本主義一般のもとでの特質を規定し(第二パラグラフでのA),第三パラグラフでのA),B)),続いてこの特質の内容を資本主義の歴史的発展過程に沿って確認していく(第二パラグラフでのB),C),D),第三パラグラフでのC),D))という論理展開をとっていることである。だが、両者の共通性は論理展開における形式的な共通性にのみ求められるものであろうか。第三パラグラフを検討するなかで、第二パラグラフでは示唆されていたものがより明確化あるいは具体化されていることをみだが、かかる関連は、両者がその内容におい

でも共通性を有することを示すものであろう。この点は、第三パラグラフの内容を第一パラグラフとの関連において把握するときに明らかになる。第三パラグラフにおいては、第二パラグラフの終結点として確認された質、量ともに規定をうけた過剰資本をその論理展開の出発点に据えるのではなく、資本主義一般のもとでの過剰資本の措定をもって出発点としている。続いて、この出発点を前提として資本主義一般のもとでの過剰資本と資本輸出との関連が確定され、それに基づいて資本輸出の歴史的意義が論定されている。端的に言って、第二パラグラフは資本の支配の国際化における現実的姿態の歴史的変遷において、第三パラグラフは資本輸出の歴史的変遷の意義において論述されているのである。では、第三パラグラフはかかる内容において、第一パラグラフといかに関連しているのか。ここで、第一パラグラフの論理が有する今一つの側面を確認しておく必要がある。そこでの「典型的」という表現は、およそ非典型的なものの同時存在を前提としてのみ意味をもちうるものであろう。すなわち、ある事物のみの存在が認められるある与えられた状況のもとで、その事物が「典型的」であるという表現はおよそ意味をなしえない。このことは、第一パラグラフの論理においては、各々の典型性にはそれと区別される各々の非典型性が対応し、かつ典型の移行において、商品輸出が典型性から非典型性に転化したこと、従って資本輸出の典型性には商品輸出の非典型性が対応するものであることが含まれていることを示している。では、自由競争が支配していた資本主義のもとでの商品輸出の典型性に対応する非典型性とは一体いかなるものか。第三パラグラフのB)において、資本主義一般のもとでの資本輸出の存在が確認され、またC)においては、資本主義一般を体現する資本主義の自由競争段階では資本輸出は可能性に止まると指摘されていたことに注意されたい。そこでの叙述が意味することは、資本輸出は資本の支配の国際化を担うものとして資本主義の自由競争段階において存在したにもかかわらず、かかるものとしては典型性を獲得しえず、従って非典型性に止まったということではなかろうか。資本輸出の可能性と資本輸出の非典型性との

対応、資本輸出の必然性と資本輸出の典型性との対応関係を読みとるべきであろう。このように理解すれば、第三パラグラフと第一パラグラフとの関連はもはや明瞭である。第三パラグラフの展開は、第一パラグラフに含まれる論理のもう一面、すなわち資本主義の自由競争段階においては非典型性にすぎなかった資本輸出が独占段階において典型性を獲得するに至る論理を具体化したものに他ならない。典型から典型への移行を軸として展開されている第二パラグラフとまさしく好一対をなしている。ここにおいて、第三パラグラフと第二パラグラフとの内容上の共通性も明らかになる。それは、両者がそれぞれ第一パラグラフの論理が有する両面の各々の一方に焦点を定めた展開の内容を有していることに求められなければならない。第二パラグラフでの質、量ともに規定された過剰資本の措定から直接に資本輸出の必然性を規定し、もって第一パラグラフでの資本輸出の典型性獲得の意味を説くことも決して不可能だったわけではなかろう。だが、レーニンはそこで一度論理展開を中断させて再度資本主義一般にたちかえり、そこでの過剰資本の存在の確認及びそれと資本輸出との関連から論理を説きおこしている。このことは、第二パラグラフの展開においてのみではなく、それが第三パラグラフの展開と相俟ってはじめて第一パラグラフの論理の内容が十全に把握されるものであったことを意味している。第一、第二、第三パラグラフのかかる相互関連のうちに、第二パラグラフで示唆されていた過剰資本と資本輸出の典型性との係りが明確化されていることはもはや多言を要しないであろう。

さて、これまで検討してきた第三パラグラフの展開と内容から、ここでの過剰資本はいかなるものとして浮び上がってくるであろうか。第一に、過剰資本それ自体は資本主義一般のもとでも存在し、国外に輸出されるべきものであること、第二に、しかしながら、資本の支配の国際化、資本主義的国际経済関係の創出過程からみれば、かかる過剰資本は資本主義一般を体現する自由競争段階の資本主義において資本輸出の可能性(資本輸出の非典型性)をつくりだす条件に止まり、資本輸出の必然性(資

本輸出の典型性)を規定する条件としての過剰資本は第二パラグラフで措定されている質、量ともに規定されたそれに他ならないこと、そして第三に、第二パラグラフにおけると同様に、ここでもまた過剰資本がその存在を獲得するに至る論理、すなわちその発生のメカニズムは説かれてはいない、ことである。この三点目に関しては、そこでの発展の不均等性と大衆の飢餓的な生活水準は決して過剰資本発生の根拠として措定されたものではないことに注意すべきであろう。なぜなら、それらは資本制生産様式にとって不可避ではあるが、条件、前提として把握されており、過剰資本の発生は、第二パラグラフが示すように、かかる条件、前提のもとで存在する資本制生産様式に内在的な資本蓄積の解明を通して規定されなければならないからである。

このようにみれば、第二、第三パラグラフを通しての過剰資本把握における特徴は、一方では資本輸出に係って極めて重要な位置を与えられているにもかかわらず、他方ではその発生に至る論理が欠如しているということに帰着する。だが以上がレーニン「帝国主義論」にみられる過剰資本把握のすべてであろうか。ここで注意すべきことは、第二パラグラフで措定された過剰資本は独占の形成に根本的に規定されたものであり、しかもかかる独占の形成もまた「帝国主義論」において説かれていることである。このことは、レーニンによる過剰資本把握の解明にあたっては、レーニンによる独占形成把握の検討が不可欠であることを意味しよう。「帝国主義論」における過剰資本把握を四章の枠内のみみ閉じこめてはならない所以である。この点に係って更に次のことが考慮されるべきである。第二パラグラフが独占段階での膨大な過剰資本の発生をもって閉じられ、第三パラグラフが資本主義一般のもとの過剰資本の措定から説かれていることは、前者が後者の伏線たる位置を与えてれていることを示しており、前者における過剰資本と後者における過剰資本とが何らかの側面において同一性を有するものであることを意味している。事実、第三パラグラフの展開においては、資本主義一般のもとの過剰資本と独占段階での過剰資本とが明示的には区別されず、資本輸出

の必然性規定において国外に輸出されるべき過剰資本はあたかも前者をもって足りるかの如く説かれているのである。このことは、独占形成の論理の検討を通して過剰資本把握に接近することが、同時に資本主義一般のもとでの過剰資本把握に対しても一定の方向を与え得ることを示唆している。「帝国主義論」四章以外の検討が要請される今一つの所以である。以下、節を改めてみてみよう。

- 1) 「帝国主義論」全集」22巻, pp. 277—78
- 2) 「帝国主義は資本主義のうえに立つ上部構造である。」(レーニン「ロシア共産党(ボ)第八回大会」全集」29巻, p. 156)
- 3) 「資本主義一般にとって特徴的な、農業と工業との発展の不均衡……」(「帝国主義論」全集」22巻, p. 239)。
- 4) 拙稿Ⅱ, pp. 212—18。なお拙稿Ⅰも参照。
- 5) 拙稿Ⅱ, p. 217において、この移行を媒介する一定の条件として独占の形成は指摘したが、それに伴う過剰資本の発生を指摘しなかったのは不十分であった。

IV

周知のように、「帝国主義論」四章に先立つ一～三章では、まず一章において生産の集積に基く独占の形成が、二章では銀行業における独占の形成とそれに基く銀行の新たな役割が論定され、続く三章では独占体を基礎とする銀行と産業との融合、癒着——金融資本の発生によって、独占形成の実際の力と意義は金融寡頭制支配に結実することが分析されている。

独占形成から金融寡頭制支配に至るかかる論理展開のなかで、ここでの課題たる独占形成と過剰資本との関連からみて重要な位置を与えられているのは第三章である。そこでまず、三章の検討を通して四章との関連をみておこう。

三章は次の指摘で結ばれている。「金融資本の依存と結びつきとの国際網をつくりだすうえで、資本の輸出の演じる役割については、とくに立ちいって論じなければならない。⁽¹⁾」この指摘は、資本輸出の論理と実態

とを明らかにすることは金融資本の依存と結びつきとの国際網の形成を明らかにすることに他ならず、逆に言えば、かかる国際網は資本輸出を通して体现するものであることを表明したものに他ならない。世界的規模での金融寡頭制支配にとって資本輸出が決定的とも言える意義を与えられているのである。

では、「金融資本の依存と結びつきとの国際網」とはいかなる内容を与えられているのか。それは三章末尾の直前に位置する次の指摘にうかがうことができる。「これら四つの国（イギリス、フランス、アメリカ合衆国、ドイツ——引用者）は、合計して四七九〇億フラン、すなわち全世界の金融資本のほとんど八〇%をもっている。のこりのほとんど全世界は、なんらかの形で、右の国々——国際的銀行家、世界的金融資本のこれら四本の『柱』——にたいする債務者と貢納者の役割を演じている。⁽²⁾」すなわち、金融資本の国際網とは、金融資本のほとんどを所有する少数の国々とそれをほとんど所有することのない大多数の他諸国との債権、債務関係を主要な内容とするものである。従って、資本輸出はこの債権、債務関係をつくりだす意義を担うものとして位置づけられているのであり（先にみた資本の支配の国際化の意義もここにある）、事実、四章での第四パラグラフ以降はこの実態の分析にあてられているのである。

ここで、後の展開との関連で一つ注意を要するのは、先の引用にみられた少数の国々がそのほとんどを所有する金融資本が具体的には有価証券として表現されていることである。すなわち、少数の「これら四つの国」とは「およそ一〇〇〇億から一五〇〇億フランの有価証券を所有している四つのもっとも富裕な資本主義国⁽³⁾」に他ならないのである。この点はレーニンの次の認識と結びついている。「他のすべての形態の資本にたいする金融資本の優越は、金利生活者と金融寡頭制の支配を意味し、金融上の『力』をもつ少数の国家がその他のすべての国家から傑出することを意味する。この過程がどの程度進行しているかは、有価証券発行の統計、すなわちあらゆる種類の有価証券の発行高の統計から、判断することができる。⁽⁴⁾」みられるように、諸国家間の金融上の力の差を意味する金融

資本の優越性は有価証券の発行高から判断可能であるが故に、レーニン
は金融資本を有価証券と同一のものであるかのように論述しているの
である。

この点に係って、更に次の二点を確認されなければならない。第一に、
金融資本の優越性が有価証券の発行高から判断できるということは、金
融資本が有価証券の発行主体であることを意味するが、⁽⁵⁾かかる発行業務
を遂行するのは銀行に他ならないということであり、⁽⁶⁾第二に、上の引用
にみられる「他のすべての形態の資本に対する金融資本」とは貨幣資本
を意味していることである。この二点目については、その直前の次の引
用から明らかになる。「資本の所有と資本の生産への投下との分離、貨幣
資本と産業資本あるいは生産的資本との分離、貨幣資本からの収益だけ
で生活する金利生活者と、企業家および資本の運用に直接たずさわるす
べての人々との分離——これは資本主義一般に固有のことである。帝国
主義とは、あるいは金融資本の支配とは、このような分離が著しい規模
に達する、資本主義の最高段階である。⁽⁷⁾」先の引用にみた「金融資本の
優越は、金利生活者……の支配を意味」するという指摘は、ここでの「貨
幣資本からの収益だけで生活する金利生活者」と明らかに対応している
ことから、「他のすべての形態の資本」が産業資本、生産的資本を意味し、
これらに対する金融資本が貨幣資本を指すものであることは疑問の余地
がなからう。

以上が四章の理解に係る三章の基本的内容であるが、三章末尾の指摘
に収斂させる方向でそこに含まれる論理を整理、確認しておこう。第一
に、産業資本、生産的資本と貨幣資本との分離は資本主義一般に固有で
あること、第二に、この分離の規模の巨大化、従って膨大な量の貨幣資
本が金融資本として有価証券の発行主体となること、第三に、有価証券
発行業務は銀行業務であることによって、膨大な量の貨幣資本は銀行の
手もとに集積されること、第四に、有価証券発行は、その所有を通して、
諸国家間に債権、債務関係を軸とする支配関係＝「金融資本の依存と結
びつきとの国際網」の形成をもたらすこと、第五に、従って、この国際

網は、産業資本、生産的資本から分離した膨大な量の貨幣資本が内外の有価証券の所有に向けられることを内容とすること、第六に、かかる国際網の形成にとって重要な役割を担う資本輸出とは、貨幣資本が国外の有価証券の所有に向けられることを内容とするものであること、以上である。

上の整理において、資本主義一般のもとでの貨幣資本が、その膨大化＝金融資本化を通して、資本輸出に結びつけられるものであることは明らかであるが、更に、ここでもまた、資本主義一般に固有なものの規定から、それを独占段階にまで具体化するという四章、第二、第三パラグラフにみられた展開と同一の特徴を確認できるのであり、この意味において、資本主義一般のもとでの貨幣資本が資本輸出に係るものであることが指示されているといえよう。

このようにみてくれば、三章での上の諸点と四章での過剰資本との関連もほぼ明らかになる。まず、金融資本としての膨大な量の貨幣資本が国外へ輸出されるということは、ここでの貨幣資本が四章第二パラグラフで措定された膨大な過剰資本を意味するものであることが確認されよう。産業資本、生産的資本から分離した膨大な貨幣資本の発生に金融資本の支配をみるレーニンの認識は、独占形成に伴う膨大な過剰資本の発生という認識に明らかに対応しているのである（量的側面）。従って、膨大な過剰資本とは金融資本を意味するものに他ならない（質的側面）。この点は、膨大な貨幣資本が銀行に集積されるものであり、金融資本の概念の内容が「生産の集積、そこから成長してくる独占体、銀行と産業との融合あるいは癒着⁸⁾」として把握されていることに対応している。第二に、資本主義一般に固有であり、かつそのもとで存在する貨幣資本は、四章第三パラグラフでの資本主義一般のもとで存在し、国外に輸出される過剰資本と同一のものである。けだし、資本主義一般のもとでの有価証券発行と貨幣資本との対応関係の存在を前提としてのみ、有価証券発行の増大と貨幣資本の膨大化との対応関係、すなわち金融資本の優越性を問題にできるのであり、かかる前提のなかには、貨幣資本と資本輸出

との関連が含まれていると見做されるからである。上の二点は、資本主義一般のもとであれ、独占段階のもとであれ、国外に輸出される過剰資本は貨幣資本形態において存在するものであることを示している。四章で示されている資本主義一般のもとでの過剰資本と独占段階のもとでのそれとの何らかの側面における同一性はこの点に求められなければならない。第三に、しかしながら、ここでは資本主義一般のもとでの産業資本、生産的資本と貨幣資本との分離は事実の指摘に止まり、その分離がいかに関生するものであるかに係る論理は説かれていない。金融資本の支配がかかる貨幣資本の量的膨大化から規定されていることは、金融資本としての膨大な貨幣資本の発生の論理もまた説かれていないことを意味する。このことは同時に、四章において欠如させられていた過剰資本発生の論理が、三章においても欠如していることを示している。ここでもまた最大の問題点は過剰資本発生の論理に帰着する。

- 1) 「帝国主義論」全集」22巻, p. 276
- 2) 同上, p. 276
- 3) 同上, p. 276
- 4) 同上, p. 275
- 5) 次の指摘をみられたい。「……金融資本は、会社創立、有価証券の発行、国債等々によって、……」(同上, p. 268)。「金融資本の主要な業務の一つである有価証券発行……」(同上, p. 270)。
- 6) 「『有価証券発行業務ほど高い利得をもたらす銀行業務は一つもない』。(同上, p. 270)
- 7) 同上, pp. 274-75
- 8) 同上, p. 260

V

以上でレーニン「帝国主義論」における資本輸出の論理及びそれに係る過剰資本把握についての検討を一応終えるが、最後に、これまでみてきた点を簡単に整理し、あわせてそのなかに資本輸出論と資本輸出の必然性論との関連を探ることによって結びに代えておこう。

レーニン「帝国主義論」がすぐれて独占形成を基礎とする資本主義の最高の発展段階を分析の対象としたものであり、従ってそこでの資本輸出分析もまた、それが独占資本主義段階において有する固有の意義に焦点が当てられていることは当然である。だが他方で、かかる分析においては同時に、資本主義一般及びそれを体現する自由競争段階の資本主義のもとでの資本輸出の存在とその意義が十分に念頭に置かれつつ論理展開がはかられているのである。四章第一、第二、第三パラグラフの内容と相互関連、四章と三章との関連は何よりもこのことを明確に示すものであった。本稿が、資本輸出論と資本輸出の必然性論との関連を「帝国主義論」のなかに見出そうとした根拠もここにある。しかしながら、「帝国主義論」では、資本主義一般のもとでの過剰資本にしる、独占の形成に規定されたそれにしる、それらが資本蓄積との関連において発生を規定されることには触れられてはいるが、いかなる資本蓄積の構造に基いて発生を獲得するに至るかは説かれてはいない。ここに過剰資本把握をめぐる最大の難関が存在する。

だが、「帝国主義論」における如上の過剰資本把握は同時に次のことをも指示するものであろう。第一に、レーニンが資本主義一般のもとでの過剰資本について、その発生の実事のみを指摘し、発生過程を論述しなかったことは、それが「帝国主義論」の資本輸出分析における主要な任務ではなかったことと相俟って、すでに解決ずみの問題として扱われていたことを意味しよう。では、レーニンはこの解決がどこでなされていると見做していたのか。言うまでもなく、資本主義一般の科学的分析の書たるマルクス「資本論」においてであろう。資本主義一般のもとでの資本蓄積の展開がいかにして産業資本、生産的資本からの貨幣資本の分離を不可避的に発生させるのか、この点の解決が「資本論」においてはいかに与えられているのか、改めて「資本論」に即した検討が要請されよう。資本輸出論にとっての最大の課題もまたこの点に存在する。第二に、独占資本主義段階における過剰資本は質と量との両面において把握されていた。そして、この質的側面に関しては、四章では独占形成に伴

う資本蓄積が規定要因として指摘され、三章では過剰資本としての膨大な貨幣資本が独占的銀行の手もとに集積されることに規定要因をみている。このことは、資本蓄積の過程において分離、形成されてくる貨幣資本が独占的産業と独占的銀行との融合、癒着によって独占的銀行の手もとに集積されることが独占的資本蓄積の主要な内容をなすものであるとレーニンが把えていたことを意味しよう。従って、かかる融合、癒着の過程、一言にして金融資本の発生史を解明すること、この点に独占資本主義段階での過剰資本を把握する鍵があるといえよう。資本輸出の必然性論の解明もまたこの点に係っていることはもはや多言を要しないであろう。

従って、過剰資本の解明を通しての資本輸出論と資本輸出の必然性論との関連の解明は、資本主義一般のもとでの過剰資本としての貨幣資本が、独占形成を媒介とする金融資本の発生によって、独占的銀行の手もとに集積されていく必然的過程の解明によって与えられるものに他ならないのである。資本輸出論、資本輸出の必然性論の解明とともに後日を期したい。